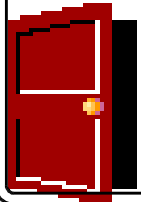


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年11月17日 文責 渡邊

読書通信への意見や感想をありがとうございます！ 今回も、どうかご家庭での読書活動推進についての アイデアを聞かせてください！

保護者の皆様方には、この読書通信を読んでもらうとともに、意見や感想を寄せていただきますこととても嬉しく思います。4月からスタートし、これまでたくさんの意見や感想を拝見することができました。ありがとうございます。

はじめに、6年生の保護者からいただいた感想を紹介します。

「読書活動への扉を開く」（10月17日を読んで）

自分の意見が言えない子を、どうやったら言えるようになるのか調べたことがあります。それは「本」でした。本で言葉を覚えて、これは善だ、これは悪だと想像することを与えると、自分の意見を言える参考になるというよいアイデアでした。

（6年生保護者）

「読書活動への扉を開く」（10月20日を読んで）

大人になってから「戦争」という項目に、とても興味をもちました。TVをつければ、今はロシアとウクライナが戦争をしていて、この時代では身近になりました。私は体験したことがないけれど、そんなきっかけから「戦争」の本をこれから読んでみようと思っています。（6年生保護者）

「読書活動への扉を開く」（10月26日号を読んで）

今回の『扉を開く』正直、内容が難しかったです。ただ、読書の秋が始まったということを実感しました。私は、読書が苦手なのですが、自分の世界に閉じこもらないように、少しでも新しい自分にチャレンジしていこうと思います。（6年生保護者）

上記の感想は、共通のものとして読書の大切さについて書かれています。学校では、読書の時間を確保したり、友達との読書郵便をしたりすることで読書活動を進めています。それぞれのご家庭においても、各々のお宅に合わせた取組をされていることと思われま

す。ここで、「読書の効果」について紹介したいと思います。静岡県立中央図書館の「子ども図書研究室だより」の10月号に、慶応義塾大学環境情報学部教授である今井むつみ氏の『言葉の発達、思考の発達を助ける絵本読みと読書』と題した講演の内容が紹介されていました。



【読み聞かせの様子】

語彙をただ知っているだけでなく、文脈が変わっても使える語彙力を育てることが学力につながります。語彙力を育てるには何が一番有効かという点、小さい頃からの読み聞かせと読書です。『プルーストとイカ』（マリアン・ウルフ著、小松淳子訳、インターシフト、2008）によると、読書の本当の目的、目指すべき目標は、書いてある文章の内容を自分の血肉にしてそこから自分の考えを作っていけるようになることです。小学校以降の子どもの語彙の成長、発達に最も大きな役割を果たすのは読書で

あり、自分で読むこと、読んでもらうことによって語彙を増やしていきます。幼児期での大人が話す言葉のシャワーや絵本読みの経験は子どもの一生に影響を与えます。実際豊富な読み聞かせ経験の有無は就学までの獲得語彙数に「3000万語」も差を生むとアメリカの調査で言及しています。子どもは新しい言葉を覚えていく中で、言葉の仕組みも学び、自分で探索していきます。(中略)

読み聞かせ、読書というと紙とデジタルとどちらがよいのかという問いがあります。紙と比べてデジタルに欠ける要素は2つあります。1つ目はデジタルでは一方向の流れにしかならないことです。紙で大人が対面で読んであげる時はどこを読むか、いつ読むか、子どものペースに合わせて名前を言ったり、教えたりしています。例えば特定のページ、特定のものに対して、ものの名前を言ってあげる時、実はリードを取っているのは子どもです。しかし、デジタルの絵本ではもともと作られたものであるため双方向のやり取りにはならず、上手く学べません。2つ目のデジタルに欠けることは想像の余地がないことです。紙の本では絵本に素敵な絵があり、想像の余地がたくさんありますが、デジタルではアニメーションの細部までが鮮やかに描かれてしまうため、想像する部分を奪ってしまいます。この2点がデジタルと紙の本との大きな違いと言えます。

言葉を教える時は子どもが親をリードしており、子ども自身の行動が子どもの言葉の学びをより促進させます。そのため、絵本を読む時に子どもの興味の方に注目することが大切であり、それが絵本読み、読み聞かせを通じて言葉の発達、認知の発達、思考の発達、推論の力の発達を促す、そして学力の基盤になっていくということです。

(静岡県立中央図書館『子ども図書研究室だより』より)

学校では、子供たちがタブレット端末を使って家庭学習ができるように準備を進めています。タブレット端末を活用した学習は未来を生きる子供たちに必要な学習であることは間違いありません。しかし、読書も大切なことだと思います。重要なのは、タブレット端末での学習を行うか、読書を行うかといった二者択一ではなく、バランスよく子供たちに必要な力を育成することではないでしょうか。前期の学校評価において、「お子さんは読書をしますか？」の質問項目で、保護者の評価が低位だったことは家庭での読書の取組の困難さを表しています。今後もますます難しくなることが予想されますが、学校と家庭が連携し読書活動に取り組んでいきたいと思っています。

保護者の皆様方をお願いします。下記に家庭で読書を進めるためのご意見をお聞かせいただきたく思います。たくさんのアイデアをお待ちしています。よろしくお願いします。

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」(11月17日号)を読んだ感想

()年()